

## 乳牛のライフサイクル

乳牛は、人間と同じように子どもを産まなければミルクが出ません。だから、ミルクを搾っている乳牛は、すべて出産を経験したメス牛です。乳牛は、人間と比べてかなり“早熟”で、遅くとも2歳半には子牛を産み、生乳を搾れるようになります。牛の妊娠・出産をしっかり管理することは、酪農家にとってたいへん重要なテーマとなります。

### 生まれて数十分で立ち上がり、初乳を飲みます。

**1** 日本では、牛の交配はほとんど人工授精で行われています。人工授精が成功して妊娠した母牛は、約10カ月の妊娠期間を経て子牛を出産します。9割以上の子牛は、背伸びをするように前足を伸ばして頭から産まれてきます。生まれたてのホルスタインの子牛の体重は40～45kg。生まれて30分～1時間ほどで立ち上がり、分娩したばかりの母牛から搾った初乳を飲みます。



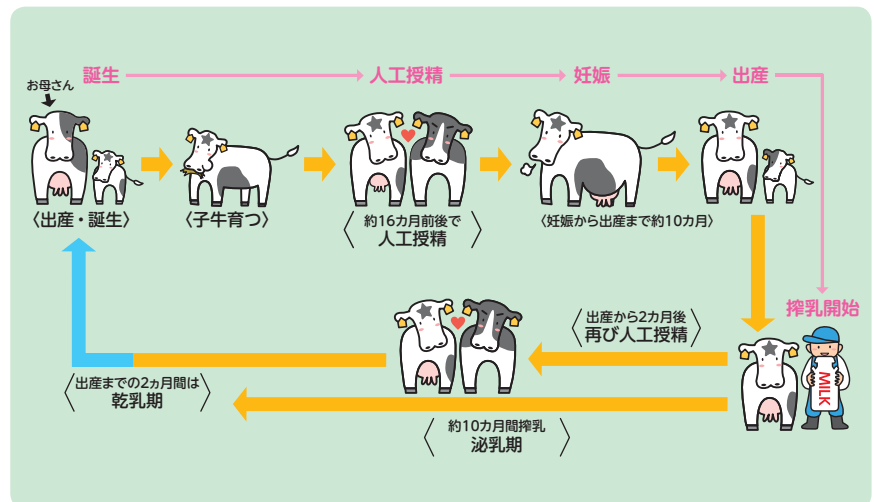
### 誕生直後から人の手で大切に育てられます。

**2** 子牛は病気への抵抗力が弱いので、すぐに母牛から離され、一頭ずつ飼育する専用の小屋で育てられます。子牛は生まれて1週間くらいは母牛の「初乳」（分娩後、最初に出てくる生乳）を飲みます。初乳には、消化しやすいタンパク質やビタミンなどがたくさん含まれ、また、細菌などからカラダを守る免疫成分も含まれています。分娩後1週間ほどすると母牛のミルクは、牛乳の原料となる生乳として出荷されるようになります。



### 1歳半になるとお腹に子どもを宿します。

**3** 生後2カ月して哺乳期を過ぎた子牛は、離乳して大人と同じエサを食べ始めます。酪農の世界では、離乳してから14～16カ月くらいまでの期間を育成期と呼び、この期間の牛を育成牛と呼びます。育成期を終えるころの牛は、体重が400kg前後になります。600kg以上ある大人の牛と比べてカラダは小さいのですが、このころになると発情が始まるので、最初の人工授精を行います。



### 出産後約300日間、ミルクを出し続けます。

**4** 妊娠して約10カ月後には出産し、母牛としてミルクを出します。泌乳量（搾乳量）はだんだん増えて出産後2～3カ月で最も多くなり、その後少しずつ減りながら約300日間ミルクを出し続けます。なお、出産後60日ごろに2回目の人工授精を行います。出産予定日の2カ月前には、次の出産に備え、ミルクが出ていても搾乳を止めます。この期間を乾乳期といいます。

### 妊娠、出産、泌乳期、乾乳期を繰り返します。

**5** こうした周期を平均して3～4回ほど繰り返した後、乳牛はその役割を終えて食肉用として出荷されます。乳牛は、ミルクを生産するために改良された経済動物です。歳を取ってミルクの出る量が減ったり、品質が低下すれば、飼うことができなくなります。しかし、酪農家は、自分たちの生活を支える動物として、牧場にいる間、愛情を込めて乳牛を大切に飼養しています。